

# 悪魔の設計図

横溝正史



角川文庫

あくま せつけいず  
悪魔の設計図



昭和五十一年七月三十日 初版発行  
昭和五十一年九月十日 再版発行

定価は、カバーに  
明記してあります

著作者

横溝正史

発行者

角川春樹

印刷者

村沢達弘

東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三  
一〇二〇東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

0193-130435-0946(0)

# 悪魔の設計図

横溝正史











角川文庫

あくま せつけいず  
悪魔の設計図



昭和五十一年七月三十日 初版発行  
昭和五十一年九月十日 再版発行

定価は、カバーに  
明記してあります

著作者

横溝正史

発行者

角川春樹

印刷者

村沢達弘  
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三  
一〇二〇東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 旭印刷・本間製本

0193-130435-0946(0)





「ねえ、きみ、美代ちゃんとかいったね。何かこうおもしろいことはないかね。おれはもう退屈で退屈で死にそうだよ」

お給仕に出たお美代という女中をつかまえて、俊助がまるで子供のようになぐりこねだしたのは、着いてからたしか三日目のこと。

「ほほほほ。旦那はよほどせわしいかたとみえますわね。あたしなんざ、たまにはゆっくりと息抜きがしてみたいと思っと思っていますのに」

「ふむ、息抜きもいいがね、どうもおれには性にあわんらしい。ように駄々をこねだしたやっぱり都会で泥棒や人殺しを追っかけてるほうが板についてるんだね。まるで子供のようにな」

「おや、旦那はするとあれなんですか、ほら」

お美代はびっくりしたように、腰にピストルをつるまねをしてみいな。

「いや、そのほうじゃないが、新聞記者だからどのみち人にやてさ。ご存じありませんか？」

「あら新聞社のかたなの。そう、それでやっぱり泥棒を追っかけあたしなんざ、たまにはゆないますの。不思議ねえ」

「何が不思議さ、柄にもないというのかい」

「いえ、そうじゃありませんけど、ほら、隣室のお客さまね」

「うんうん、あのやぎひげを生やした、田舎いなかの八卦見はっけみみたいなの御老人かい」

「まあお口の悪い、いえね、あのかたは弁護士さんなんですってさ。ご存じありませんか？」

やはり東京のかたよ、名前は黒川さんていうの」

「知らないね。東京には弁護士は多いからね。やはり静養かい」

「さあなんですかね。毎晩芝居を見にいらっしやるほか、何もなさっているようではありませんけどね」

「芝居？ ああそうそう、青柳珊瑚さんご大一座とかいうのぼり轆が立っていたが、あれだね」

「ええそうよ。珊瑚さんというのは女役者で、とても美人だって評判よ。きつとそれがごひいきなのね、殿方はいくつになってもお若いわ」

お美代はそういうと、くすくすと笑いしたが、俊助はちょっと妙な感じに打たれたのである。黒川弁護士とは隣室同士だから、廊下で会えばあいさつぐらひはする。いつも長いやぎひげをきれいにそろえて、度の強そうな眼鏡めがねをかけた老人だ。年は六十の坂を越しているのだから。いつかその老人が外出するところを見たら、羊羹色ようかんいろの紋付きに七つ下りの仙台平せんたいひらをはいて、天気の良いのに洋傘を持っていた。どう考えても旅回りの女役者にうつつを抜かす柄とは思えないのである。

「あら、何を考えていらっしやるの。ねえ、旦那もひとつお芝居でも御覧になったらいかが？ なんならお供させていただきますわ」

「うん、旅芝居も時にとっては一興だが」

「ねえ、お供させてちょうだいよ。二枚目にとてもきれいな役者がいるんですって。あれなん

てたっけ、そうそう、都築静馬つづまっていうんだわ」

「こん畜生、さてはおれをカモにして、そいつの顔を見たいんだな」

「あら、そんなわけじゃありませんけどさ」

「よしよし、ひとつカモになってやろうか」

「あら、本当、うれしいわ」

というようなことから、はからずも俊助はこの旅の空で、心にもない田舎芝居を見物することになったのだが、後から思えばこれこそ彼が、あの前代未聞みもんともいうべき奇怪な犯罪に、そもそも一歩踏み入れる発端はつたんとなったのである。

### 第三幕目

小屋も小屋だったが、役者も役者だった。

背景や衣装のみじめさに相応して、役者の芸もまずかった。いやまずいというより、中にはほとんど素人しょうとに近いようなものもいた。だいたいが歌舞伎と剣劇をちゃんぽんにしたようなものだが、それでも、煤すすけた平土間を九分通り埋めた観客が、けっこう楽しそうにしているのが不思議なくらいだった。

出し物は一番目が新作で『怪談鴛鴦草紙おしどり』という題がついている。粗悪な漣直すきなしの番付けに刷

った筋書を読むと、美しい御愛妾ごあいしやうがいて、忠義で美貌ひぼうの若侍わかしがいて、その若侍が御愛妾が生きていてはお家のためにならぬとばかり、ある夜その寝所に忍び込み、たんだ一討ち、御愛妾を殺害して逐電ちくでんするのだが、後にこれが御愛妾の妹と、それと知らずに契りを結ぶ、つまり一種の因果劇で、どうやら御愛妾の幽霊なども出るらしい。

いうまでもなく、この御愛妾と妹の二役ふたやくが座頭ざがしらの珊瑚さんごで、忠義な若侍というのが、お美代ちゃんひいきの都築静馬つづきしずまだった。

「旦那、ほら、あれが都築よ、きれいだわねえ」

お美代は呼吸いきが詰まりそうな声でささやいたが、その都築というのは、一座の中でも拙劣ちやくじやくなので、俊助にはとんと興味をひかなんだ。それよりもむしろ観客席を見ているほうがよほど楽しかった俊助は、お美代の注意も上の空で聞き流してしまっただが、後から思えばこれが俊助にとっては大失敗だったのだ。間もなくあのような大事件が起こると知っていたら、何をおいてもその役者に注目したであらうのに。――

その大事件というのは三幕目に起こったのである。筋書によると、都築静馬の若侍が御愛妾を討ち果たして立ち退く場面なのだ。

いまこれを脚本のト書流とがらにいうと、舞台中央上手寄りかみてに常脚二重つねあしふたえの舞台、数寄屋好みすきや、渡り廊下で上手の御殿につづいている心よき所に秋草あきくさ、遣水やりみづ、石燈籠いしどうろう、おりおり明滅する螢ほたるなどよろしく、すべて御愛妾〇〇の方の部屋の態てい。――ということになるのだらう。

その二重の縁側に腰をおろして、絹張りの団扇うちわを使っているのが愛妾あいせつに扮した座頭の珊瑚珊瑚なのである。なるほど評判だけあってすばらしい美人だ。それに年も思ったより若く、どう多く踏んでも二十五は出ていないだろうと思われる。

お部屋さまはしばらく腰元どもを相手に、家中かみやうの若侍の品定めなどをしていたが、やがて何が何して何じやわいのうというようなせりふがあつて、とど二重にじゆうの中に入ると、びたりとうしろ手に障子をしめる。

多分これから臥床ふしどに入る心なのだろう、するすると帯を解く姿が、いかにも挑発的なポーズとなつて白い障子に映ると、そのたびに見物席から野卑な半畳がとんで満場をわかつた。やがてそれも終わると屏風びょうぶを引き回して影は見えなくなる。腰元どもも下手しもてへ消えた。

と、急に舞台前面から客席の電燈がパツと一時に消えてしまうと、あとにはただ、御愛妾の部屋の障子だけが、銀幕のようにくっきりと明るく取りのこされる。

やがておあつらえの虫の声、忍しのぶ、三重みえ、鉦しやうの音。いよいよ若侍の出なのだ。劇場の中はシーンと静まり返って、見物のひとみというひとみは吸いつけられるように舞台に注がれている。

やがて、上手の渡り廊下から黒装束覆面の侍が忍びの心でそろそろと現われる。

「都築ッ！」

観客席から黄色いことばがかかった。お美代はむろんかたずをのんでみつめているのである。ドドドドと風太鼓の音、鉦の響き、陰気な百万遍。——合方あいかたよろしくあつて静馬扮するところ

の若侍はとど障子の中に忍びこむと、スラリと脇差わきざしを抜き放つのが、くつきりと明るい障子に影となつて映つた。

「ええい！」

ツケの音とともにさつと脇差がおろされる。

「あれえ？ あ、あああああ」

魂消たまげるような声がシーンとした劇場の中に響きわたつた。とその時である。黒い影はハツとしたように身をかがめたが、すぐ起き直ると、そのまま暗い舞台を横切つて、風のように上手のほうへ消えてしまったのだ。

「まあ変ね、あれでも芝居かしら」

もっと纏綿てんめんたる情緒を期待していたお美代は、さすがにあっけにとられたようだった。

「ははははは、うまいじゃないか。今の狼狽ろうばいしたところなんざ真に迫っていたぜ」

「だって、なんぼなんでも芝居ですもの、もっと料しながなけりゃね」

お美代はいくらか不平らしい。

舞台はしばらく空虚。——やがて下手からひとりの若党が現われた。この若党はかねてからお部屋さまと密通している、御家老からの密書を持って来たのである。

「旦那、あの若党になつているのが珊瑚の御亭主なんですってさ。田代眼八たしろという役者よ。まるで敵役かたきやくみたいな名前ね」

眼八の若党は腰元を呼び出してしばらく押し問答をしていたが、結局お部屋さまを起こそうということになって障子を開いた。障子を開くと屏風の陰から、夜具にくるまった女の頭が、かすかに観客席からも見えるのである。

「お部屋さま、もし、お部屋さま」

眼八の若党は二重に上ると軽く夜具をゆすぶっていたが、そのうちにワッと叫んでうしろにのけぞったのだ。

「ヒ、ヒ、人殺しだ！ ヒ、ヒ、人殺しだ！」

むろん芝居の筋書どおりだから、だれも驚かない。ただ今までのせりふの調子と、ちょっと変わったものを妙に思ったくらいのものである。すると眼八はしばらく、あっけらかんとした様子をしていたが、やがてまたハッと気を取り直すと、おずおずと御愛妾の側へはいよって、恐る恐る夜具をまくりあげた。

「ウワッ！ 人殺し、人殺しだッ」

その真に迫った仰天ぶりに、観客席からいっせいに拍手がわき起こる。眼八はそれを聞くと、ぎょっとしたように頭をもたげたが、急にすつくと立ち上がると、

「人殺しイ、人殺しだア、だれか来てくれ」

叫びながら舞台の上で地団駄を踏むのである。見物客はそれを見るといよいよ割れ返るような拍手喝采<sup>かつさい</sup>。



「田代！」

「大統領！」

眼八はそれを聞くとふいにベソをかくような表情をした。その表情がうまいとてまたもや盛り上がるような拍手喝采。喝采が大きくなればなるほど、眼八はいよいよベソをかくように顔をゆがめる。するとまた拍手、ほめことば。

「おや、こいつは少し変だぞ」

俊助が思わずハッとして体を前に乗り出した時である。ふいに舞台の上では世にも変てこな事が起こったのである。

そのお家騒動の舞台面へ、やぎひげに山高帽、七つ下りの羽織袴はおりはかまという滑稽こっけいないでたちの老人が洋傘を片手にちょこちょここと現われたのだからたまらない。観客席はワーッと一時にわいてしまった。

「爺じいイ、引っ込め！」

「手前てまえの出る幕じゃないぞ」

「あら黒川さんだわ」

黒川弁護士は観客席の怒号叱声にも委細かまわず、ちょこちょこ走りて二重へとび上がると、ちよっと夜具のなかをのぞいてみたが、すぐくるりと振り返ると、驚おどぶかみにした洋傘をめちやくちやに振り回しながら、

「幕だ！ 幕だ！」

と、やぎひげをふるわせて、気違いのようになつたのである。その姿はこの上もなく滑稽ではあつたが、しかしどつか、満場を圧するようないき魄があつたので、観客はフーッと気をのまれて黙りこんでしまったが、その時早く、さつと櫛の外へとび出した三津木俊助、ツツツ！ と花道を舞台のほうへ走っていた。

### 黄水仙の紋章

何が何やら理由がわからない。

観客の怒号喧騒の中に、するすると幕がしまつてしまつたが、やがて現われた頭取の、役者に故障があつたから、今日はこれで打ち切り、入場料は木戸口で払い戻しますという取り乱したあいさつをきいて、はじめてただごとでないことがブーンと観客の胸にひびいてきた。

「人殺しがあつたのだ」

「座頭の青柳珊瑚が殺されたのだ。さっきのあれは芝居ではなかつたのだ」

観客席はたちまち上を下への大騒ぎだ。わめく者、ののしる者、泣き叫ぶ者、中にはおもしろがつてねばっている物好きな連中もあつたが、大半はわつとばかりに雪崩を打って木戸から外へとび出した。